

報道各位

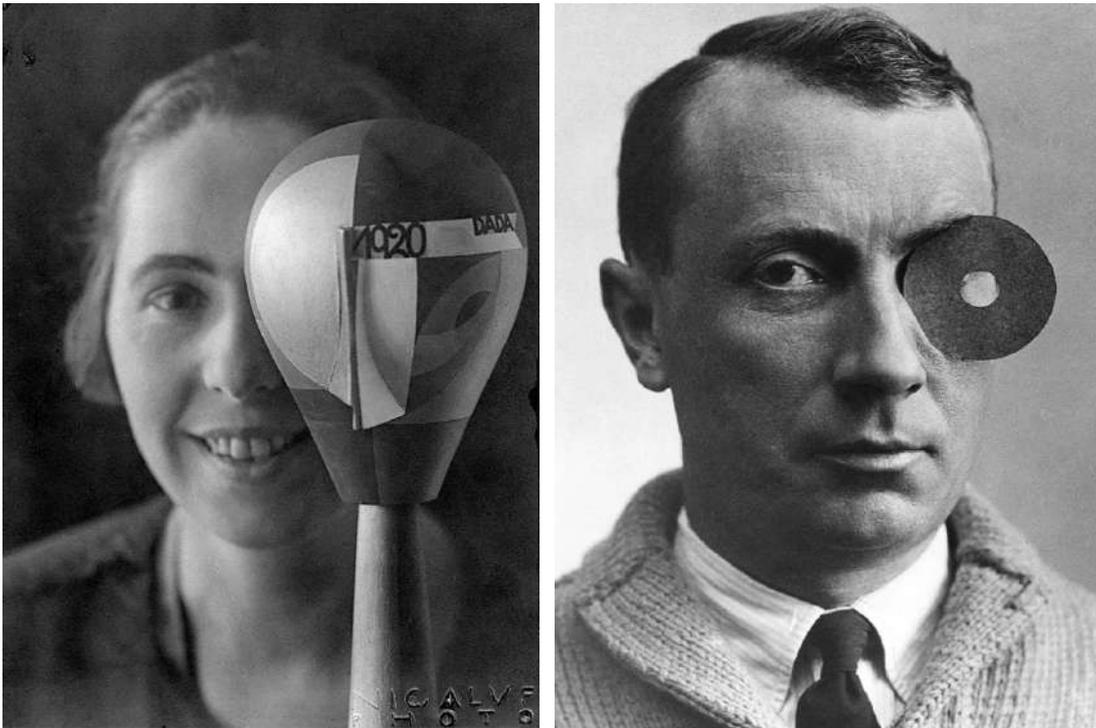
2024年12月24日

公益財団法人石橋財団 アーティゾン美術館

ゾフィー・トイバー=アルプとジャン・アルプ

2025年3月1日[土]-6月1日[日]

出品作品点数、図版を追加しました。



左：《「ダダ・ヘッド」とゾフィー・トイバー》1920年、アルプ財団、ベルリン/ローラントシュヴェルト 撮影：ニック・アルプ、右：《「臍=単眼鏡」とジャン・アルプ》1926年頃、アルプ財団、ベルリン/ローラントシュヴェルト © VG BILD-KUNST, Bonn & JASPAR, Tokyo, 2024 C4762

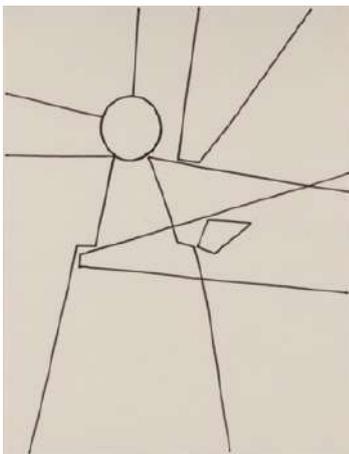
公益財団法人石橋財団アーティゾン美術館（館長 石橋 寛）は、「ゾフィー・トイバー=アルプとジャン・アルプ」展を開催します。

テキスタイル・デザイナーとしてキャリアを開始し、緻密な幾何学的形態による構成を、絵画や室内空間へと領域を横断しつつ追求したゾフィー・トイバー=アルプ（1889-1943）と、詩人としての顔を持ちながら、偶然的に生まれる形態に基づき、コラージュやレリーフ、彫刻を制作したその夫、ジャン・アルプ（1886-1966）。本展は、この20世紀前半を代表するアーティスト・カップルをめぐり、個々の創作活動を紹介するとともに、両者がそれぞれの制作に及ぼした影響やデュオでの協働制作の試みに目を向け、カップルというパートナーシップの上にはいかなる創作の可能性を見出せるか、再考するものです。ドイツとフランスのアルプ財団をはじめとする国外のコレクションよりトイバー=アルプの作品45点、アルプの作品40点、そして、多様な様態からなる両者のコラボレーション作品14点、計99点を出品予定です。

【見どころ】

1) 20 世紀前半の前衛美術シーンを代表するアーティスト・カップルの展覧会

本展はふたりのアーティストの創作を紹介する二人展にあたりますが、夫婦の関係にあった二名を取り上げる点を特色としています。女性のアーティストの数が増加する 19 世紀後半以降、美術史には数多のアーティスト・カップルがみられます。その中でもトイバー=アルプとアルプは、各々、ダダや構成主義、シュルレアリスム、デ・スタイル、抽象といった前衛芸術の前線で活動しながら、デュオ、つまり両者のコラボレーションによる作品も残しています。1943 年にトイバー=アルプが逝去して以降も、その残された作品はアルプの創作を刺激し続けるなど、ふたりの創作は絶えず密接な関係にありました。その意味で 20 世紀前半を代表するアーティスト・カップルといえるこの両者の関係は、単なる逸話にとどまるものではなく、カップルというパートナーシップにおける創作の可能性をはじめ、この時期の女性のアーティストの立場や、芸術ジャンルのヒエラルキーに関する考え方など、20 世紀の美術を考察する上で普遍的なテーマを映し出しており、本展はそれらを射程に収めたものです。



ゾフィー・トイバー=アルプ、ジャン・アルプ《デュオ=デッサン》1939年、アルプ財団、ベルリン/ローラントシュヴェルト © VG BILD-KUNST, Bonn & JASPAR, Tokyo, 2024 C4772



ゾフィー・トイバー=アルプ、ジャン・アルプ《共同絵画》1939年、アルプ財団、ベルリン/ローラントシュヴェルト © VG BILD-KUNST, Bonn & JASPAR, Tokyo, 2024 C4772



ジャン・アルプ（ゾフィー・トイバー=アルプの作品に基づく）《無題》1950年頃、アルプ財団、ベルリン/ローラントシュヴェルト © VG BILD-KUNST, Bonn & JASPAR, Tokyo, 2024 C4772

2) ゾフィー・トイバー=アルプの先駆的な創作活動を包括的に紹介

幾何学的抽象と色彩理論の研究を基盤に、テキスタイル、家具デザイン、建築設計、絵画など多方面で創作に取り組んだトイバー=アルプは、2021年にMoMA 他で回顧展が開催されるなど、現在、再評価が進んでいます。周到かつ機知に富んだ構成を特徴とするその表現は、20 世紀前半の抽象の文脈における高度な達成として評価されています。また、女性にも門戸が開かれていた応用芸術から出発し、後に前衛芸術の最前線で男性のアーティストと肩を並べるまでに至ったトイバー=アルプの足跡は、女性のアーティストの新しいキャリアを示しており、歴史的な意義をそなえています。本展は、夫アルプに比して、日本では紹介の機会がきわめて限られてきたトイバー=アルプの創作活動が包括的に示される貴重な機会となります。



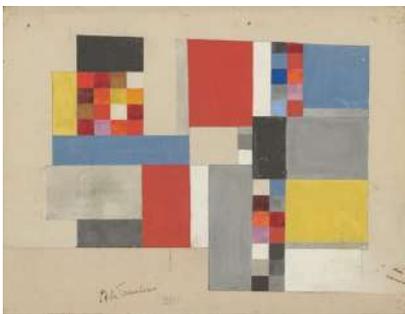
ゾフィー・トイバー=アルプ
《抽象的なモチーフによる構成（手帳カバー）》1917-18年頃、アールガウ州立美術館、アールラウ



ゾフィー・トイバー=アルプ
《帯状のニードル・レース》1920年頃、アルプ財団、ベルリン/ローラントシュヴェルト



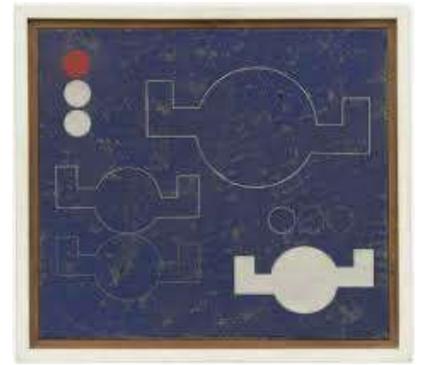
ゾフィー・トイバー=アルプ
《パッチワークのズボン》1924年頃、アルプ財団、クラマール



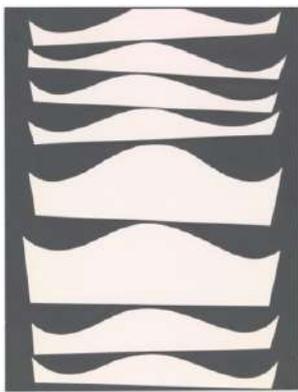
ゾフィー・トイバー=アルプ
《オーベット 200（ストラスブールのオーベットのバーの天井デザイン）》1927年、アルプ財団、ベルリン/ローラントシュヴェルト



ゾフィー・トイバー=アルプ
《調節可能家具（グレーの棚）》1929年頃、アルプ財団、クラマール



ゾフィー・トイバー=アルプ
《角張った腕のついた円の線と面による構成》1930年、アルプ財団、ベルリン/ローラントシュヴェルト



ゾフィー・トイバー=アルプ
《漸次的な移行》1934年、アルプ財団、ベルリン/ローラントシュヴェルト



ゾフィー・トイバー=アルプ
《レリーフの構成（長方形、幾何学的要素）》1936年、アールガウ州立美術館、アールラウ



ゾフィー・トイバー=アルプ
《さまざまな要素のある垂直-水平の構成》1919-38年頃、アルプ財団、ベルリン/ローラントシュヴェルト

3) “For Arp, Arp is Art” –ジャン・アルプのユニークな創作を再評価

有機的なフォルムの彫刻作品が特に知られるジャン・アルプですが、彫刻に取り組むようになるのは1930年代初めからで、その創作活動は絵画と詩を起点としています。ただし、カンヴァスに油彩で描く従来の絵画の形式にアルプは背を向け、平面と立体を統合させたレリーフの形式を創出するとともに、表現においては偶然的に見出されるイメージやコラージュに関心を向けるなど、規範や束縛から自由な創作を展開していきます。造形芸術の傍らで、詩という言語芸術を常に並行させるアプローチもまた、その芸術を独自のものにしています。「アルプその人がアート」と評したマルセル・デュシャンの言葉は、さまざまな前衛の動向の間を自在に行き来したアルプのユニークな立ち位置を端的に物語るものですが、本展では20世紀美術におけるその重要性と今日に通じる意義を再考します。



ジャン・アルプ《アルパーデン：アルプ・アルバム（『メルツ』第5号） | 口髭=帽子》1923年、アルプ財団、ベルリン/ローラントシュヴェルト© VG BILD-KUNST, Bonn & JASPAR, Tokyo, 2024 C4772



ジャン・アルプ《花の頭部をもつトルソ》1924年、アルプ財団、クラマール© VG BILD-KUNST, Bonn & JASPAR, Tokyo, 2024 C4772



ジャン・アルプ《無題（デッサン・デシレ）》1934年、アルプ財団、ベルリン/ローラントシュヴェルト© VG BILD-KUNST, Bonn & JASPAR, Tokyo, 2024 C4772



ジャン・アルプ《ダフネ》1955年、アルプ財団、ベルリン/ローラントシュヴェルト



ジャン・アルプ《貝殻=帽子》1965年、アルプ美術館バーンホフ・ローランズエック Photo: Mick Vincenz

【作家について】



人形劇「鹿の王」のための人形の前のゾフィー・トイバーとジャン・アルプ、1918年、チューリッヒ

ゾフィー・トイバー=アルプ (1889-1943)

スイスのダヴォスに生まれる。スイスとドイツの応用芸術学校に学んだ後、1915年にチューリッヒでジャン・アルプと出会い、1922年に結婚。テキスタイル・デザインの教育に従事する傍ら、色彩理論と幾何学的抽象の研究を基盤に空間装飾や絵画も手がけるなど、ジャンルを横断する創作活動を展開した。

ジャン・アルプ (1886-1966)

ドイツのシュトラスブルク（現在のフランスのストラスブール）に生まれる。ドイツ国内とパリで美術を学んだ後、「青騎士」やダダイズムの活動に参画。1920年代以降は、独自に創出した造形言語をもって、シュルレアリスムと抽象の間を行き来しながら、主にコラージュやレリーフ、彫刻の領域で創作を行った。

【ゾフィー・トイバー=アルプ／ジャン・アルプ 略年譜】

	ゾフィー・トイバー=アルプ	ジャン・アルプ
1886年		ドイツのシュトラスブルク（現在のストラスブール）に生まれる
1889年	スイスのダヴォスに生まれる	
1904-07年		ヴァイマルの美術学校に学ぶ
1907-13年	ザクトガレンとミュンヘンで応用芸術と美術を学ぶ	
1908年		パリの画塾アカデミー・ジュリアンに登録するも、教育内容への反発から翌年には家族の住むスイスのヴェグギスに戻る
1910年		スイスのルツェルンで若いアーティスト・グループ「デア・モデルネ・ブント（現代の連合）」を結成する
1912年		『青騎士年鑑』に挿絵を提供する
1913年		『デア・シュトゥルム』誌で詩作品が紹介される
1914年		ケルンでマックス・エルンスト、パリでパブロ・ピカソらに出会う。この時期、コラージュや刺繍による創作を行うようになる
1915年		第一次世界大戦下のパリを離れて中立地のスイスへ戻る
	ゾフィー・トイバーとジャン・アルプ、アルプが参加していたグループ展を機にチューリッヒで出会う	
1916年	ジャン、トリスタン・ツァラとともにダダの運動を創始。トイバーもパフォーマンスなどを通じて参加する各自の作品制作の傍らで、コラボレーションによる制作を試みるようになる	
	スイスの工芸美術館でテキスタイル作品を発表するとともに、チューリッヒのトレード・スクールで応用美術を教えるようになる	
1918年		ベルリンに赴き、同地でダダの運動を主導するクルト・シュヴィッターズらと出会う この頃、創作上の関心が幾何学的抽象から有機的なフォルムへと向かい始める
1920年		自然物に因んだ「オブジェ言語」を創出、作品に実践し始める
1922年	スイス南部の町プーラで結婚する	
1923年	ヴァイマルのバウハウス展を訪れる	シュヴィッターズ編集の『メルツ』誌に、オブジェ言語による版画作品《アルパーデン》と詩作品を提供する
1925年	パリのアール・デコ博のスイス部門の審査員を務める。自らも出品する	パリのギャラリー・ピエールでの第1回シュルレアリスム展に参加する

1926年	ストラスブールに拠点を移動。フランス国籍を取得する ストラスブールの実業家オルン兄弟より、同市内の娯楽施設「オーベット」の建設に伴う内装デザインの依頼を受ける (1928年に完成)	
1927年	パリ郊外の町クラマルに地所を購入。夫妻の住居兼アトリエとして、トイバー=アルプが設計を行う(1928年に完成、移住) 抽象の画家ミシェル・スーフォールとその周辺と交流し、幾何学的抽象に再び接近する	
1930年	幾何学的抽象を志向するグループ、「円と正方形」に加入。同グループの展覧会に作品を出品する	
		この頃より、ちぎった紙によるコラージュ「パピエ・デシレ」を試みるようになる。並行して、彫刻では木と石膏による曲線的なフォルムを志向するようになる
1931年	「セルクル・エ・カレ」を継承したグループ「抽象-創造」に参加する(1934年に脱退)	
1937年	ニューヨーク近代美術館での「幻想美術、ダダ、シュルレアリスム」展に出品する	
	バーゼルのクンストハレでの「構成主義者」展に出品する	
1938年	パリのギャラリー・ボザールでの国際シュルレアリスム展に出品する	
1940年	第二次世界大戦の戦火を避けて、南フランスのグラスに疎開する 同じくグラスに滞在していたアルベルト・マニエリ、ソニア・ドロネーとともに、リトグラフ集「アルバム・グラス」を制作する	
1943年	ニューヨークでペギー・グッゲンハイムの主宰する「今世紀の美術」ギャラリーでの「31人の女性による展覧会」に出品する チューリッヒ滞在中に、事故による一酸化炭素中毒で逝去	ゾフィーの死によるショックから通常の創作活動を中断する
1947年		通常の制作活動を再開する
1950年		ヴァルター・グロピウスの依頼で、ハーヴァード大学に設置するレリーフの制作のためにアメリカを訪れる
1957年		パリのユネスコ本部に設置するレリーフを制作する
1959年		スイスのロカルノ近郊に邸宅を構える。友人でコレクターのマルグリット・アーゲンバッハと再婚する
1966年		スイスのバーゼルで逝去

【関連プログラム】

土曜講座

第1回 3月1日[土]

「ゾフィー・トイバー=アルプとジャン・アルプ 生涯と作品（仮）」

講師：ヤナ・トイスチャー（アルプ財団、ベルリン/ローランシュヴェルト、キュレーター）、セバスチャン・タルディ（アルプ財団、クラマール、コレクション部門長）

第2回 4月19日[土]

「ゾフィー・トイバー=アルプとジャン・アルプのめざしたもの（仮）」

講師：島本英明（石橋財団アーティゾン美術館学芸員）

第3回 5月10日[土]

「ダダと抽象を超えて—ゾフィー・トイバー=アルプとジャン・アルプの芸術上の〈協働〉（仮）」

講師：河本真理（日本女子大学国際文化学部教授）

会場：アーティゾン美術館 3階 レクチャールーム

時間：14:30-15:30（13:30 開場）

*事前申込制

*詳細は当館ウェブサイトにてお知らせします。<https://www.artizon.museum/program>

【開催概要】

展覧会名： ゾフィー・トイバー=アルプとジャン・アルプ

主催： 公益財団法人石橋財団アーティゾン美術館

後援： ドイツ連邦共和国大使館、ゲーテ・インスティトゥート東京、在日フランス大使館／アン
スティチュ・フランセ、在日スイス大使館

会場： アーティゾン美術館 6階展示室

会期： 2025年3月1日[土]—6月1日[日]

開館時間： 10:00—18:00（毎週金曜日は 20:00 まで）*入館は閉館の 30 分前まで

休館日： 月曜日（5月5日は開館）、5月7日

入館料（税込）： 日時指定予約制（2025年2月12日[水]よりウェブ予約開始）

ウェブ予約チケット 1,800 円、窓口販売チケット 2,000 円、学生無料（要ウェブ予約）

*予約枠に空きがあれば、美術館窓口でもチケットをご購入いただけます。

*中学生以下の方はウェブ予約不要です。

*この料金で同時開催の展覧会を全てご覧いただけます。

担当学芸員： 島本英明、杉本渚

同時開催



碓伊之助展

^{はざま}碓伊之助（1895—1977）は、ヒュウザン会でデビュー以後、画家として活躍するかたわら、一時は東京藝術大学で指導にあたり、晩年は色絵磁器の創作に取り組みました。本展では、その創作活動だけでなく、収集家、日本初のマティス展を実現した実務家としての多様な側面も紹介します。

碓伊之助《燈下》1941年、碓伊之助美術館（加賀市美術館寄託）

会場：アーティゾン美術館 5 階展示室

会期：2025年3月1日[土]ー6月1日[日]

開館時間：10:00ー18:00（毎週金曜日は 20:00 まで）＊入館は閉館の 30 分前まで

休館日：月曜日（5月5日は開館）、5月7日



石橋財団コレクション選 コレクション・ハイライト

19世紀から20世紀にかけての西洋近代美術や、抽象表現を中心とする20世紀初頭から現代までの美術、そして日本の近現代美術など、石橋財団コレクションの代表作のなかから様々な魅力をご紹介します。

アルフレッド・シスレー《サン＝マメス六月の朝》1884年、石橋財団アーティゾン美術館

会場：アーティゾン美術館 4 階展示室

会期：2025年3月1日[土]ー6月1日[日]、6月10日[火]ー9月21日[日]

開館時間：10:00ー18:00（毎週金曜日は 20:00 まで）＊入館は閉館の 30 分前まで

休館日：月曜日（5月5日、7月21日、8月11日、9月15日は開館）、5月7日

6月3ー8日、7月22日、8月12日、9月16日

入館料（税込）：日時指定予約制

＊予約枠に空きがあれば、美術館窓口でもチケットをご購入いただけます。

＊中学生以下の方はウェブ予約不要です。

＊会期により入館料が異なります。

◆ウェブ予約チケット 1,800 円、窓口販売チケット 2,000 円、学生無料（要ウェブ予約）

＊この料金で下記同時開催の展覧会をご覧頂けます。

3月1日[土]ー6月1日[日]「ゾフィー・トイバー＝アルプとジャン・アルプ」展、「碓伊之助展」

6月24日[火]ー9月21日[日]「オーストラリア現代美術 彼女たちのアボリジナル・アート」展

◆ウェブ予約チケット 500 円、窓口販売チケット 500 円、学生無料（要ウェブ予約）

＊6月10日[火]ー6月22日[日]は4階展示室のみ公開、6・5階展示室は休室します。この料金で「石橋財団コレクション選 コレクション・ハイライト」のみご覧頂けます。

＊6月2ー9日の休館時に一部展示替えをいたします。

アーティゾン美術館 〒104-0031 東京都中央区京橋 1-7-2
Tel: 国内 050-5541-8600 海外 047-316-2772 (ハローダイヤル) www.artizon.museum

アクセス：JR 東京駅（八重洲中央口）、東京メトロ銀座線・京橋駅（6番、7番出口）、東京メトロ・銀座線/東西線/都営浅草線・日本橋駅（B1 出口）から徒歩 5 分

【広報用図版】

1 点のみ掲載の場合は 1 ページに掲載の図版をお使いください。
掲載時には必ずクレジットをご記載ください。また、文字載せやトリミングはご遠慮ください。

■図版は、下記サイトからダウンロードしていただけます。

広報用画像データのダウンロードはこちら
<https://www.artpr.jp/artizon/sophieandjean>



本プレスリリースについてのお問合せ先
アーティゾン美術館 広報課 松浦・小川・宮武

*一般の方のお問合せ先は 050-5541-8600 (ハローダイヤル) です。
E-mail: publicity@artizon.jp
TEL: 03-6263-0132 (広報課直通・誌面への掲載はご遠慮ください。)
〒104-0031 東京都中央区京橋 1-7-2